



格子状防風林が北海道遺産に選定されたことをきっかけに、中標津町では平成14年9月、「地球環境ワイズユース大学」が開かれた。この発想のきっかけは「KJ法」で有名な川喜多二郎氏が学園紛争時代に開いた「移動大学」にある。今回のワイズユース大学では、都市計画や地域づくりの分野で活躍する社会人、学生と地域住民の計35名が集い、3日間にわたって、ニセコ、十勝、九州の阿蘇など全国各地で取り組まれているワイズユース（アウトドア、森づくり、グリーンストックなど）の事例について、その実践者たちから講義を受けるとともに、自然散策や釣り、乗馬、カヌーなどを体験する現地講習も行った。



スペースシャトルから撮影された防風林。格子状の様子が宇宙からでもよく分かる。



Data

中標津町開陽台から防風林の一部を展望できる



●お問合せ先

中標津町経済振興課地域振興係

Tel.01537-3-3111

った。宇宙飛行士になった気分です。「意識のフィルター」を働かせようとした人々の熱意が「ただの林」を地上絵に変えた。その歴史は約100年前にさかのぼる。開拓使顧問の米国人、ホールズ・ケブロンが3・3キロごとに182メートル幅の防風林の設定を提唱。開墾も防風林を残す形で行われたが、やがて薪炭材や坑木として大半が切られた。森林を復元するために成長の早いカラマツが選ばれ、本格的な植林が行われたのが30〜40年前。防風と防霧を兼ねて中標津、別海、標津、標茶の4町の総面積1万5708ヘクタールに植えられた。大地が雪で覆われる冬。葉を落としたカラマツ林の格子は、とりわけ美しいコントラストとなって地球からのメッセージを宇宙へと伝える。

まちづくりと遺産

モデルツアーを実施

●守る会

道が「北の遺産構想」を立ち上げようとした2年前、中標津町街づくり推進室の係長だった矢島竜二さん（49）は、いち早く動いた。「日本一の防風保安林を守る会」を立ち上げ、「ただの林」にしか見えない防風林の壮大なスケールをエンデバーからの写真を見せて訴えた。

選定後の7月に行われた「モデルツアー」では、視界330度の開陽台からホーストレッキングを実施。手前に格子状防風林、背後に国後島を眺めるロケーションに25人の参加者も大満足だった。

●馬の道

「3GR」の名づけ親の佐々木さんは、中標津町の市街地から開陽台までの約15キロを「馬の道」として整備し、将来的には摩周湖から根室海峡までを結ぶ壮大なホーストレッキング・コース構想をあたためる。

●実のなる木

「幅182メートルの防風林を3分割し、中央の60メートルを広葉樹に植え替えたらどうか」。中標津町議の松村康弘さん（49）もユニークな提案をする。「真ん中に実のなる木を植えれば、子供たちも入って行くだろうし、野生動物の隠れ場所や移動経路にもなる。魅力的な林に変えるチャンス」と期待する。